

「2024年度香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 増川 知希

今回の香港への短期留学を通じて、私の国際理解や外国語学習の意欲に大きな変化があった。特に、香港の歴史や文化への理解が一層深まったことは、国ごとの価値観の相互理解という観点からも私にとって意義深いものであった。「大館」という旧・中央警察署などを復元した博物館を訪問した際に、その歴史を説明するコーナーで、『日本軍の香港占領期間、「西区憲兵隊総部」として使われ、残酷な刑と戦争犯罪がこの地で行われた。』という記載があったり、「九龍城寨」の展示コーナーにも「日本軍が九龍城寨の城壁を撤去した。」と述べられていたりしていた。日本軍が香港を占領していたという事実だけは知ってはいたが、やはり今回実際に香港に滞在することで、その歴史的事実をより深く認識できるようになった。また、香港の食文化も中国各地とは大きく異なっていた。香港は飲茶などが有名であるが、私が特に気になったのは「甜品」というデザートである。中国北方とは違い、この甜品の種類が豊富であった上に、炒飯のような主食と同時に、もしくは、主食よりも先に提供されるのである。日本では、デザートは食事の最後に食べるのが一般的であったから、文化の違いに驚かされた。まるで香港では甜品も主食とみなされているかのようであった。

また、言語の違いも印象的であった。香港では多くの人が広東語を母語としているため、我々外国人に話しかける際に使用する言語も自ずと広東語になるのだが、私は広東語を話すことができないので、私が普通話（マンダリン）で話して欲しいと頼むと、「あなたの普通話の方が上手だよ」と笑いつつも普通話で話してくれることが複数回あった。さらに、京都大学の参加者とともにマカオへ行った際、路線バスの行き先表示器の漢字表記の下に「ポルトガル語」が併記されていたことに衝撃を受けた。日本や香港では、漢字表記の下に英語が併記されているのが一般的だが、マカオでは英語での表記はなかった。これはマカオが長年ポルトガル領であったからであるが、返還から25年経った今でも、ポルトガル支配の影響が根強いのだとは思ってもみなかった。

香港中文大学の中国語の授業もとても有意義なものであった。私は京都大学での第二外国語として中国語を選択してから中国語の学習を始めたため、中国語学習歴はまだ1年余りである。香港中文大学の事前のテストの結果、授業が全て中国語で進められるという上級クラスに振り分けられ、ついていけるか不安であったが、先生がたがとても「ゆっくり・綺麗に」話してくださったので、問題なくほとんどのことを聞き取れた。また、上級クラスの学生の中国語力は軒並み高く、私は特にスウェーデン出身の学生と仲良くなったのだが、彼との会話に用いたのは中国語であって、英語はどうしても通じない時に使う程度であった。その雑談中に出現した、一方が知らない単語をより簡単な中国語で説明する、説明してもらおうということが毎日のようにあり、とても知的な営みであった。説明してくれる相手がネイティブスピーカーではなく、中国語学習者であるということも、私にとってはとても心地のいい時間であった。

私は、2025年9月から1年間、中国への交換留学の申請をしている。HSK（漢語水平考試）6級に合格すれば大学側から推薦していただけるという現状なのだが、今回の香港への短期留学を通して、いくら検定のレベルが高いとしても、諦めずになんとかしてHSK6級に合格したい、と一層強く思うようになった。先に述べたように、文化や歴史の各方面においてこれまでそれほど意識していなかったことが、たったの3週間でこれほどまでに顕在化したのだから、1年間の留学を経験したらどれほど大きなものを得ることができるのだろうか、という期待が膨らんだからである。また、交換留学後の進路として、「中国史の研究」を選択するのではない

か、と漠然とした考えを持っていたが、この留学を通して「現代中国の研究」という選択肢もいいのではないかと思うようになった。いずれの道を進むとしても、今現在なすべきことは、中国と日本がこれまでお互いどのような影響を及ぼし合ってきたのかということを知ることだと思う。この課題を胸に、交換留学の資格を得られるように中国語の勉強をしていきたい。